

アンナ・パーニナ氏公開レクチャー「映画翻訳を語る」報告書

公開レクチャー「映画翻訳を語る」概要

- ・ 日時：2016年2月17日（水）13:00-14:30
- ・ 講演者：アンナ・パーニナ氏（ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員、元千葉大学外国人研究員）
- ・ 会場：千葉大学西千葉キャンパス 千葉大学アカデミック・リンク・センター1階セミナー室（まなび）I棟
- ・ 予約不要・入場無料
- ・ コメンテーター：大塚萌（千葉大学人文社会科学研究所・博士後期課程）
司会：鴻野わか菜（千葉大学文学部・准教授）
- ・ 主催：千葉大学男女共同参画推進部門・千葉大学文学部
協力：日本ロシア文学会
（本セミナーは、千葉大学「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」の招聘支援制度によるものです）

アンナ・パーニナ氏とは

1976年生まれ。国立ロシア人文大学を卒業後、ロシア科学アカデミー東洋学研究所（Институт востоковедения РАН）大学院修了。ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員。言語学、日本語学専攻。日露機械翻訳・日本語の多義語・語彙タイポロジー、翻訳のストラテジーにおける言語・文化的要素の研究に取り組むと同時に、宮崎駿をはじめとする日本のアニメーションの翻訳者としても活躍。2008年11月～2010年6月には、日本学術振興会外国人特別研究員として千葉大学文学部に滞在。『ロシア語の教科書』（ナウカ出版）の監修を務めるなど、日本におけるロシア語教材の制作にも貢献している。

レクチャー詳細

日本語学者であると同時に、日本のアニメーションの翻訳家としても活躍されているパーニナ氏をロシアから招聘し、学生・院生・研究者・一般市民を対象とする公開レクチャーを開催した。



千葉大学広報室の助力を得て、レクチャーについての情報が複数の新聞のプレスリリースのサイトに掲載されたことで、千葉県、東京都、神奈川県、栃木県、茨城県などから多数の聴講者が来場した。

パーニナ氏は、英語・日本語間、ロシア語・日本語間の翻訳の事例を多数挙げながら、文学や映画の翻訳の諸問題について幅広い視点で講義を行った。

たとえば、パーニナ氏がロシア語に翻訳した宮崎駿のアニメーション『天空の城ラピュタ』については、「木漏れ日」という言葉が英語とロシア語でどのように翻訳されているか、英語の翻訳にどのような誤訳の例があるか（「でっかい」などの口語的な表現で特に誤訳が起こりやすい）について具体的な説明が行われた。

神西清のチェーホフ訳や、川端康成の『千羽鶴』の各国語への翻訳などで生じた誤訳についても、誤訳の背景についての考察が行われた（例：作品タイトルでは意外性のある言葉や造語が使われやすいという思い込みのために、タイトルの翻訳では突飛な誤訳が生じやすい）。



しかし、パーニナ氏は、誤訳が生じる様々な要因について多数の具体例をもとに分析した上で、翻訳とは原作をより深く理解するための創造的なプロセスにもなりうるということについて説明した。

たとえば、パーニナ氏がロシア語に翻訳した『ルパン三世カリオストロの城』には「ゴート札」という言葉が登場する。英語では **goat money**（山羊の金）と訳されているが、画像を見るとゴシック体のアルファベットが確認されることから、パーニナ氏は「ゴシック札」と翻訳している。この場合、日本語で作品を見る観客よりも、ロシア語で作品を見る観客の方が、もとの言葉にこめられた意味を直接的に理解する機会が得られることになる。

翻訳に際しての様々な工夫も紹介された。星新一の『収容』のように、登場人物の性別が最後に明らかになる小説をロシア語に訳す際には、（主語の性別によって語尾が変化する）過去形を使うことができない。こうした場合、全文を（語尾で性別が分

からない) 現在形に訳し直すという工夫が有効である。

また、他の言語で特別な意味を想起させる音を持つ固有名詞の場合、表記や音を微妙に変えて翻訳することが必要になる。「ラピユタ」はスペイン語では品の悪い言葉を連想させるため、映画のタイトルからは外されている。『未来少年コナン』に登場するレプカは、ロシア語では「かぶ(репка)」を連想させ、失笑を誘う。パーニナ氏は、『崖の上のポニョ』の翻訳では、登場人物である宗介の名前をそのまま Соокэ と表記すると「おしゃぶり(соска)」を連想させるので、Сооскэ と表記したという。

パーニナ氏は、日本語の表記の問題について説明するにあたって、ポリヴァーノフなどの日本語学者の先行研究について言及し、ロシアにおける日本語学の歴史についても解説を行った。翻訳、言語学、ロシアにおける日本語学の歴史、ロシアにおけるアニメーションをはじめとする日本文化の受容などについて幅広く取り上げた刺激的なレクチャーだった。

レクチャーの後半では、日本のコミックスのドイツ語への翻訳について研究しているコメンテーターの大塚萌氏(千葉大学人文社会科学研究科・博士後期課程)が、外国語に訳しにくい言葉(一対一で対応していない単語、他の国では普及していない食品など)をどう訳すかという問題などについて、パーニナ氏とディスカッションを行った。

レクチャーの最後に、パーニナ氏が、「アニメーションや日本文化のファン以外の人のために訳す」と発言されたのが印象に残った。ある国や地域についての予備知識を持たない人にも通じる自然で豊かな翻訳は、他者と他者を結ぶ重要な活動である。

パーニナ氏がレクチャーでロシアにおける日本語学の歴史に言及したように、翻訳を通じて外国の文学や映画に触れるという誰もが身近に体験している営みの背後には、人文学の蓄積がある。人文学は、映画、音楽、書籍、博物館など、すでに私達の生活の一部となっている多くのものの基盤である。

また、外国文学・文化研究全般は、翻訳、展覧会、演劇、演奏会などの様々な形で社会に広く還元されることで、異文化への関心を育て、国際理解と平和の礎になるはずである。

こうした問題について様々な提起を行ったパーニナ氏の文化・学問・翻訳をめぐるレクチャーは、きわめてアクチュアルなものだったと思われる。

謝辞

パーニナ氏をロシアから招聘するにあたって助成してくださった日本ロシア文学会に心より感謝いたします。